

# 独歩『源おぢ』考

工藤茂

一

小説「源叔父」が独歩吟客の署名で『文芸倶楽部』（第三卷一一編）に掲載されたのは、明治三十年八月のことである。『欺かざるの記』を見ると、明治三十年五月十三日の条に「今日「源叔父」の清書を了はりぬ。半紙三十枚なり」と書かれている。この時独歩は日光に在った。四月二十二日の記に、「日光山照尊院に在り」とあるから、四月から日光に滞在して「源叔父」を創作していたのであろう。その翌日の二十三日夜九時の記には、以下のように書かれている。

我身を詩人の一人と思ひ定めつ、或物書き成さんとして此の地に来りぬ。或物とは何ぞや。あゝ或物とは何ぞや。

過ぎし幾歳の事件、眼閉づれば幻と浮びて鮮やかに現はれ来る。山や河や、言ふまでもなし。彼の人の事、

此の人の事、三年昔の一夜の事、二年前の朝の事。あゝ何物か詩料ならざる。これを描きて詩と成し上げん術もがな。

経歴以外の事を誰か書き得ん。現ならざりし事を誰か夢み得ん。

右のようにして生まれた作品が、前述した「源叔父」であつてみれば、「三年昔の一夜の事」というのは、「欺かざるの記」に述べられている明治二十七年七月二十二日の一夜のことと考えられる。なぜならば「源おぢ」の冒頭には、次のように表現されているのだから。

都より一人の年若き教師下り来たりて佐伯の子弟に語学教ふること殆ど一年、秋の中頃来りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、（略）或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もや、荒きに、独りを好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下り

て主人夫婦が足投げだして涼み居し縁先に来りぬ。夫婦は灯つけんともせず薄暗き中に団扇もて蚊やりつゝ語れり、教師を見て、珍らしやと坐を譲りつ。夕闇の風、軽ろく雨を吹けば一滴二滴、面を払を三人は心地よげに受けて四面の話に入りぬ。

独歩こと国木田哲夫が二十二円五十銭の旅費をもらって佐伯に赴任したのは、明治二十六年九月三十日のことである。富永旅人宿、月本旅人宿に投宿した後、坂本永年邸に下宿、翌年七月一日日曜日に葛港の鎌田旅人宿に転居する。「欺かざるの記」を見ると、明治二十七年七月二日の項に、

午後七時半記ス

一日は日曜日、此日午前

坂本氏を去りて桂港の浜に宿を転ず、蒸気問屋なり。

とある。そして同年七月二十三日の記に、

昨夜雨あり今日雨あり、人再生の思ひあり、青稲蘇生の色あり。

昨夜涼風に乗じて宿処の主人等と語る、夜更けて雨をきゝつゝ一文を草じぬ

と記されている。小説「源おぢ」の冒頭の部分と右の日記の箇所を照合してみれば、「夕闇の風、軽く雨を吹けば」という小説の描写が、「昨夜雨あり」「人再生の思ひあり」「涼風に乗じて……」という日記の記述によって生まれたことが納得できる。ただ小説において「宿の主人は事もなげに此翁が上を語りぬ。げに珍からぬ人の身の上のみ、かゝ

る翁を求めんには山の蔭、水の辺、国々には沢なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たゞ何者をか秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱の如き思ふ。これは余が例の怪しき意の作用なるべき歟。さもあらばあれ、われ此翁を懐ふ時は遠き笛の音きゝて故郷恋ふる旅人の情、動きつゝ、又は想高き詩の一節読み了はりて限りなき大空を仰ぐが如き心地す」と述べられている源叔父については、その日の日記には何らの言及がない。そこで前年の十一月二十七日の条に見える、「昨夜、二階を下り坂本老人と語る、佐伯に一個の老翁あり。奇怪の者を担ふて行くをしばく見受けぬ。此老翁の事を問ひ、多少聞き得たり。此翁同情に堪へず何れの時か遇ふて親しく語る可し」というその老翁を源叔父と見なす見方も行われている。事実、学研の全集の注も「永年の子息真澄氏によれば、この老翁は中の谷の避病院の爺で、日々町役場との間を往復したといふ。「源おぢ」の構想のもとになつた」としている。もっとも、「構想のもとになつた」という注記は必ずしも源叔父のモデルであることを意味しない。けれども、そう誤解される可能性を持った表現ではあつた。このことについては小野茂樹が、「独歩研究家の中には、無条件にこの老翁が源おじであると決めてしまっている人もいるが、私はむしろこれは源おじとは違う人間だと思つている」と言い、その理由を以下のように書いている。

それは源おじに当る人物が住んでいた葛港から独歩の

下宿坂本（略）までは小一里もの遠路離にあつたのに、渡船業の源おじが日記にあるように「しばしば」この遠い道を歩いて町の方へ出かけてくることは恐らくなかつただろうし、また葛港から町へ来るにしても、無理に坂本の前を迂回する必要はなく、他に適當な道はあつただから。

こう書いた上で氏は、さらに「坂本真澄氏の話では、坂本の近くの養賢寺裏に避病院があり、そこに「源爺」という小使の老人が住んでいて、時々坂本の前の道を通つて、避病院と町役場との間を往き来していたとの事であるので、私は右の日記中の「老翁」は、この避病院の老人の方だと思つている。そして小説中の「源叔父」という名前は、或はこの「源じい」の名から引いたものではなからうかと思われる。佐伯の海辺地では一般に、年長の男を呼ぶのに「○○おじ」といふ云い方をしているが、独歩はその呼び方に従つて「源じい」を更えて「源おじ」としたのでないかと思われる」と言い添えてゐる。

以上の道を実際に歩いてみた私には、氏の右の説はまことに妥當な結論であるように思われる。このことについては、松本義一もほぼ同様の見解を述べてゐる。

さて、小説では源叔父は次のように設定される。

その頃渡船を業となすもの多きうちにも、源が名は浦々にまで聞えし。そは心たしかに俠氣ある若者なりしが故のみならず、別に深き故あり、げに君にも聞かし度

きは其頃の源が声にぞありける。人々は彼が櫓こぎつゝ、歌ふを聴かんとて撰びて彼が舟に乗りたり。されど言葉少なきは今も昔も変らず。

その名は池田源太郎。妻百合、独子幸助。妻ゆりは美しく、「若き夫婦の幸しき月日は夢より淡く過ぎ」るのだが、幸助七歳の年、彼女は「二度目の産重くして」亡くなつてしまふ。さらに幸助十二歳の年、今度は独子の幸助までが、源叔父ひとり残して海に溺死する。そして最後には、源太郎自身も家の傍の松の枝に縊れて果てる。

後に国木田独歩は「源叔父其人も「紀州」と称する乞食の少年も實在の人物である。（略）而して此一編中に記述したる此兩人それ〴〵の身の上の事も事実である」と述べてゐる。そこで当時の日記である『欺かざるの記』を繙いてみると、紀州に関する記事はあちこちに見えてゐるのに、源叔父に関するそれはまったく見当らない。そこで前述したように坂本翁より聞いた老翁を、そのモデルと考えるようになったものと思われる。しかし小説に描かれた場面に符合する情景は、明治二十七年七月二十三日に記された二十二日の夜のそれであるから、やはり松本、小野説を妥當としなければなるまい。それにしても、その源叔父がどのような人であつたのか、『欺かざるの記』を繙く限りでは分らない。この不明の源叔父のモデルを突きとめた人が松本義一であつた。氏によればこのモデルは次のような人物である。

佐伯葛港の市ヶ谷地区に住んでいた渡船業の高原嘉治郎、弘化元年（一八四四）正月廿六日出生、明治廿九年（一八九六）十一月一日死亡。妻コト、弘化三年（一八四六）三月六日出生、明治七年（一八七四）八月十日入籍、明治廿三年（一八九〇）五月廿八日死亡。長男亀太郎、明治七年（一八七四）八月廿日出生、明治十二年（一八七九）十一月十九日病死。

若き教師に源叔父の身の上を語った宿の主のモデルは、鎌田旅人宿（兼汽船問屋）の清作、その妻ヨ子。

乞食紀州のモデルは、その墓標前面に「行路病者俗称紀州之墓」、左面に「自称野嶋松之助」と書かれていた人物。（以上、松本義一『国木田独歩『源叔父』アルバム』による）

右によると哲夫在伯の時、嘉治郎の妻コト、長男亀太郎は既に亡くなり、嘉治郎は一人で生活をしていたことになる。先にも引用したように、独歩は「此兩人それ〴〵の身の上の事も事実である」と述べている。けれども嘉治郎の身の上と源叔父の身の上には、以下のような相違がある。その一つは、妻と子の死亡の順序の相違。小説では妻が先に亡くなり、次に子が溺死する。しかし実際には子供が病死した後、妻はさらに十一年生きて亡くなっている。次にその死因の相違。小説では源叔父の子は十二歳で溺死し、源叔父は松の枝に縊死するのだが、戸籍上は子供は六歳で病死となっており、嘉治郎の死因は胃を悪くしたことによ

るものようである。落網代出身の高司作太郎から安藤博行の聞いた次のような聞き書を、松本は前引書に載せている。

嘉治じいが死んだ頃（廿九年）は私の小さい時で、べつだん記憶はないが、後になって父（唯治。昭和十一年旧三月廿六日没、年七十七）や老人たちから聞いたところによると、じいはい人暮しのため、朝だけ飯を炊き、面倒な時や忙しい時は、それすらもせず、仕事があれば舟を出し、生米をかみかみ櫓を押ししていた。それで胃を悪くして死んでしまったということです。

従って源叔父の縊死は、独歩の想ということになる。ところが「病死」と戸籍にある亀太郎の死因は、実は小説の幸助と同じ溺死だった。明治廿三年五月三日生まれの尾川茂吉が、「子供の亀太郎は、じいの留守中、海に溺れて死んだと聞いている」と語っていたこと、高司作太郎、高司リツ、高原カネも同様に語っていたことを、松本は報告した後、さらに「溺死が海岸地方の人々に恐れられ、かつ忌み嫌われていたので、届け出の場合、その溺死を病死と申し出たとしても、あながち無理とはいえないであろう」と『国木田独歩『源叔父』アルバム』に書いている。

第三の相違は源叔父の妻の出自と高原嘉治郎の妻の出自である。前者は小説に「妻は美しかりし。名を百合と呼び、大入島の生なり」とあるように大入島生まれと設定されているのに、後者は久部村の出身であった。

『欺かざるの記』を見ると、前に述べたように源叔父のモデルについての言及は殆ど見られない。だが、哲夫自身も渡船に乗った体験を、彼は興味深く描いている。例えば、明治二十六年十一月六日の条に記されている、その前日元越山の南にある十二段という山に登る途中で乗った川船の様子。

(略) 船土町の川岸より川船に乗りて木立と謂ふ村の川岸に着す。此間水上一里を少し越ゆ。同船者は余と弟を除きて七人、中、女三人。彼等の談話は吾が耳に新なりき。凡て此人々の談話は耳に新なり。船頭は老ひたれど逞ましげなる男なり。船ゆるやかに河流を渡る心地の面白さ。吾にはじめての事也。兩岸の紅葉、岸頭の茅屋、之をかこむまがき、其傍に立つ田舎娘、青びかる淵、きびわるげのうづ、皆吾が目にもげらしからぬはなし。此の河船もたしかに吾物語の料なりと思ふ。之れによりて往復する田舎の民、其婦、其嫗、其小女、いちくたゞさは悉く相応の美しき物語をもためはなかるまじと思はる。同情に堪へぬは此等の生涯なり。

ここに書き留められた同船者への興味、船頭への思い、それは次の七日の条に見られる、この日の帰りに乗った河

船のもう一人の船頭の記憶と共に、小説「源おち」創作の発想に關つていくように思われる。

十二段よりの帰路、又た河船に乗る、船頭只だ吾等兩人の爲めに船を行る、此船頭は先きの船頭とは別人なり。されど等しく老人なり。夕陽已に斜に秋の晴天を照らすに当り、船ゆるやかに河流をわたる、船頭は嘗て長崎に在りて黒船も造りたる事ありと自から語る、其述懐は人をして人生の経過を思はしむ、吾此老人を忘るゝ能はず。何となれば彼を一個のソールとして天地間に於ける人間の生涯となせば也。此老翁の一生と雖も、必ず深き物語あること必せり。彼何故に船大工となりしか。彼の小児の時代は如何なりしぞ。彼の親は如何。彼長崎に在る時は如何なりしぞ。彼何故に帰国せしぞ。而し(て脱力)今は一艘の小舟をこぎて人をわたし以て其生活をつゞけねばならぬに至りたる乎。彼に妻あらざる乎。彼に小兒あらぬ乎。今あるか、なき乎。彼一生の悲喜哀感は如何。若し此の如く想像し来れば此一個の翁と雖も必ず大なる物語ある可し。嗚呼此老人が一生は如何なる生命なるぞ。

一読して知られるように、右の船頭は源叔父のモデルではない。第一に海ではなく河の渡船の船頭である。第二に源叔父には長崎における造船の経歴はない。にも拘わらず、後半部を読むと、哲夫のこの船頭の身の上にもぐらす想像の延長線上に、独歩の源叔父像が位置していることに気づ

かざるを得ない。つまりこの翌年、鎌田旅人宿で聞いた高原嘉治郎の身の上を独歩は、「一個のソールとして天地間に於ける人間の生涯」となして、「源おぢ」を書き上げたのである。哲夫の河船の船頭をめぐる想像への回答が、独歩の「源おぢ」だったと言ひ換えてもよからう。そういった意味において、この老船頭は源叔父像に収斂するひとりだったのである。逆の見方をすれば、哲夫は右のような同船者、船頭に対して、常に文学的な想像を持つ青年だったと言ふことができる。そしてそれが、彼の文学を生み出していったのである。

さて、もう一つ「源おぢ」の文学空間を構成する素因を、「欺かざるの記」に拾ってみよう。

「一昨夜の宵、弟と共に海岸迄で月を賞してゆきたり。家を出でて櫓の堤をたどりて港道に出で、終に波止場の鼻に立つ。磯にさゞめく小波の、月にてりゆるやかに又た美し。のり捨てし小舟の舷<sup>かたぎ</sup>辺に月の光の落ちたるあり。嶋々の影黒く海面に映じて。其の暗き処、波、光にくだけて錦の漂ふに似たり。」（明治二十六年十一月二十六日の記）

「坂本氏を去りて桂港の浜に宿を転ず、蒸気問屋なり。（略）

海浜を散歩するは吾に新らしき自然を見せしむ。」（明治二十七年七月二日の記）

「夕暮舟を海に泛べて漫航す、嗚呼美と愛と、義務と希望との信仰よ来れ」（七月七日

の記）

「昨夜新月に乗じて舟を満潮に泛べ放流す。

肅然として天地の無極の壮麗に對す。」（七月十日の記）  
「昨日、太陽已に西に落ちて海嶋の遠影ほかに夕陽を帯ぶる頃家を出で、警報竿の小丘<sup>7</sup>に登りて遠望す。暫時くして小丘を斜に其の半腹に下り、ふと大入嶋の方を顧みたり。嶋と陸によりてかこまれたる海面湖水の如し。湖面寂々たり、北端を晩色のうちにかくす。

只た見る！ 嶋の横に当りて遠く江峰の一塊突として立つを見る。口言ふ可からず筆記す可からず。之れ壯麗にして幽隙なる自然の人知れず其の秘密の美をもらす也。」（七月十二日の記）

「昨夜月を断涯<sup>7</sup>の上に迎へ悠々たる蒼空の色、寂々たる海面の光、凡て吾をして瞑想して止まざらしむ」（七月二十一日の記）

小説「源おぢ」の空間は、佐伯の町と、葛港と大入島の間に横たわる海とによって構成されている。特に後者は、源叔父が業とする渡船<sup>おし</sup>の場を占有する空間であり、同時に妻百合と出会うそれでもある。そして、それは一子幸助を失う悲劇的な空間ともなっている。この空間設定に大きな意味を持つと考えられる哲夫の佐伯における体験を、右のように拾ひ出してみた。たとえば「源おぢ」の以下のような場面を引用することによって、それは納得されることであらう。

(略) 夕日影あざやかに照り四国地遠く波の上に浮かびて見ゆ。鶴見崎の辺真帆帆船白し。川口の州には千鳥飛び。源叔父は五人の客乗せて纜解かんとす、二人の若者駈け来りて乗りこめば舟には人満ちたり。

(略)

『我子とは誰ぞ。』老婦は素知らぬ顔にて問ひつ、  
『幸助殿は彼処にて溺れしと聞きしに。』振り向て妙見の山影黒き辺を指しぬ、人々皆な彼方を見たり。  
『我子とは紀州の事なり。』源叔父は暫時こぐ手を止めて彦岳の方を見やり、顔赤めて言放ちぬ。(略)

(略) 浦に着きし頃は日落ちて夕煙村を罩め浦を包みつ。婦舟は客なかりき。醍醐の入江の口を出る時彦岳嵐身に滲み、顧れば大白の光漣に碎け、此方には大入島の火影早きらめきそめぬ。静に櫓こぐ翁の影黒く水に映れり。舳軽く浮べば舟底たゞく水音、あはれ何をか囁く。人の眠催す様なる此水音を源叔父は聞くともなく聞きて様々の楽しき事のみ思ひつゞけ、悲しき事、気がりの事、胸に浮ぶ時は櫓握る手に力入れて頭振りたり。物を追ひやるやうなり。

なおここには多く引用しなかつたが、冒頭の引用の後半から後の部分、およびその次の引用文の前後に描かれる乗客の姿には、この章の最初に引用した川船の様子の投影が

見られる。このようにして哲夫の滞在した佐伯とその海は、「源おぢ」の文学空間としてその作品の内部に形象化されたのである。

### 三

独歩が「予が作品と事実」において「この兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一編が作品となつたのである」と述べている「兩人」のうち、源叔父については既に触れた。もう一人の乞食紀州については、哲夫自身が折にふれて書いている。「欺かざるの記」にその名が初めて見えるのは、例の老翁のことを坂本老人に問うたことを記している明治二十六年十一月二十七日の項においてである。

昨日船頭河岸にて例の乞食に遇ふ。彼れ噂の如く果して五味捨て場の汚物をさぐり何物か拾ひ出しては口に運び居たり。収二をして柿一個与へしむ。余問ふ波き乎。答ふ、甘いと其声、只だ其れ味いと云ふ意味の外的情を含めず。声、調子、様子、只だ言ふ甘い、感謝の意もなく恥辱の意もなく大喜悅の意もなく失望不平の意もなし、只だ言ふ甘いと。哀れむ可き哉 此乞食年十八九歳の由、学校の生徒より聞きぬ 昨夜又た此乞食の事を聞きたゞしぬ。自ら言ふ紀州の者なりと故に此乞食を呼びて紀州と称し誰れも其の親あるやなき

やを知らず。已に余程以前より佐伯にありと

彼はこの後に、「彼の老翁、此乞食、共に悲しき物語ならずや」とその感想を書き付けている。この日以前にも紀州と思われる乞食は登場する。たとえば十一月四日の記。そしてそれは更に、明治二十七年一月二十五日の記、同月二十九日の記、二月二十七日の記、三月九日の記に記され、後に渋谷に住んでいる時に書かれた明治三十年一月二十二日の記にも登場する。この乞食を見、思い浮かべることに、彼は以下のような思いにかられる。

「吾は吾が眼を以て自ら見て、吾が情と智とを以て自ら判断せざる可からず。」（明治二十七年一月二十五日の記）

「嗚呼等しき人間、天の下、地の上の事実、如何に解釈すべきぞ、生命其れ自身驚くべく畏る可しとすれば、この地上に捨てられたるこの生命の命運は更に意味ある驚懼の事実には非ずや。」（同年同月二十九日の記）

「あゝわれ彼の紀州乞食を思へば愈々人生の不可思議なるを感ず。世の政治家をして其の功名心を弄せしめよ。世の文人をして其の空文をたのしましめよ。願はくはたゞ吾をして何時も何時も心浮世の波に迷はんとする時、彼の乞食を忍ばしめよ。あゝ憐れの霊。今如何したる。あゝ人の子よ。今如何にしたる。あゝ神よ彼の人の上をめぐみ給へ。あゝ憐れの少年よ。」

人生とは何ぞや。あゝ人生の目的は如何。あゝ彼の乞食を思へば此間の意味の一段に深きを覚ゆ。」（明治三十年

一月二十二日の記）

以上の文章に窺うことができるのは、紀州という乞食への文学的興味と同情、それに出生の不条理ということである。同じ人間として生まれながら、人間的なものを欠落して生まれて来た少年への同情と不条理感は、後に「春の鳥」（明37）の少年六蔵<sup>⑧</sup>についても次のように述べられている。

（略）六蔵の様子を見ると、如何にも気の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。（略）白痴となると、心の唾、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角、人の形をして居るのですから全く感じがない訳ではないが普通の人と比べては十分の一に及びません。又た不完全ながらも心の調子が整うて居ればまだしもですが、更に歪<sup>いび</sup>になつて出来て居るのですから、様子が余程変です、泣くも笑ふも喜ぶも悲しむも皆な普通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。

哲夫は右のような人間存在に、いたく心を魅<sup>さ</sup>かれている。彼が後にこれらの少年を彼の作品の主人公として形象化せずにはいらなかった原因は、哲夫のこのような心の在り方にあつたのである。

ところで独歩が、同じような関心を持ちながら、「春の鳥」をではなく「源おち」を先に書いたのは、どうしてだったのであろうか。おそろくそれは、先に引用した明治三十



年一月二十二日の記と無関係ではあるまい。実はそこに紀州乞食のことに外に、「信子、御身の一生は如何。独身の一生遂に如何んするぞ。神よ此の不幸なる女の上を憐れみ給へ」という文章が記され、更に「恋愛の中に自由を願ひし此の吾、今如何。／嗚呼、自由と恋愛はわが熱情なりき。今は如何。今は如何。／恋は果敢なき夢と消えて去り、而かも此の身何時しか浮世の波に漂はされつゝあり。／あゝ、神よ。この霊を憐み給へかし。われをして永久に彼の女を愛せしめ給へ。吾をして恋の誠の中に呼吸せしめ給へ」という彼の情念が書き付けられていたのである。

#### 四

国木田哲夫が佐伯を辞したのは、明治二十七年八月一日のことである。そして、彼が、「源おち」を書き上げたのは、明治三十年五月十三日のことであった。この間わずか二年九か月余。しかしこの歳月は、彼に多様な体験を与えた。従軍記者、佐々城信子との出会い、別離、少年伝記叢書の執筆等。『欺かざるの記』を見ると、これらの体験の中でも特に佐々城信子との出会いと別離は、彼の心に深い傷を与えた体験だったようである。以下そのことを、『欺かざるの記』から簡条書式に抜き出してみよう。

明治二十八年六月十日

「佐々木豊寿トヨシウ女史夫妻の招きにより国民新聞社及毎日新

聞社の従軍記者と共に晩餐会の饗応を受けたる事、(其の時はじめて其の令嬢を見たり。(略)宴散じて已に帰らんとする時、余、携ふる処の新刊家庭雑誌二冊を令嬢に与へたり。令嬢曰く又た遊びに來り給へと。令嬢年のころ十六若しくは七、唱歌をよくし風姿素々可憐の少女なり。)」

右の令嬢が佐々城信子である。七月十一日の記には、「彼の少女の愛を吾に与へ給へ」という言葉が見え、十六日の項には「今朝佐々城氏を訪ふ。のぶ子嬢と語る。(略)今夜のぶ嬢に一書を認む」と記されている。さらに二十日の条には、「佐々城信子嬢との交情次第に深からんとするか如し、恋愛なるやも知れず」とある。そして二十九日の記。そこには令嬢がひそかに訪ねて來たことを記した後、「吾等は遂に秘密の交情を通ずるに至りぬ」と書かれていゝる。こうして二人は「最早分つ可からざる恋愛のうちに入」(八月二日の記)る。しかしこの恋愛は、信子の母豊寿の強い反対に遭って困難を極める。が、結局は以下のようになる。

同年十一月十一日の記

「午後七時信子嬢と結婚す。

わが恋愛は遂に勝ちたり。

われは遂に信子を得たり。

植村正久氏の司式の下に、徳富君の媒介の下に、竹越与三郎君の保証の下に、潮田ちせ老婦の世話の下に、吾が宅に於て、父及弟列席の上、目出度く結婚の式を挙げたり。」

同年同月二十一日の記

「十九日、信子と共に逗子に幽居す。」

右に竹越与三郎とあるのは、国民新聞社の社員、潮田ちせは幼児教育、キリスト教伝道事業に従事した女性で、佐々城豊寿等と共に婦人矯風会を創設し、会頭を勤めたこともある、と全集第七巻に注されている。

さて、このようにして幸福な家庭に入った苦の二人であったが、それは長くは続かなかつた。

明治二十九年四月十四日の記

「一昨日信子の失踪以来、吾が苦悶痛心殆んど絶頂に達せり。信子失踪行衛未だ知れず、為めに我が苦痛我が筆の尽し得る所に非ず。」

四月十二日の安息日、哲夫は信子と弟収二を伴って教会へ行く。礼拝が終つていったん外に出て来た信子は、「只今明治女学校の生徒に会ひぬ、これより直ちに同道して寄宿舎に到り星良子嬢に会ひ彼の女を吾が家に連れ帰らばやと思ふ」と哲夫に断つて復た教会に入ったきり、二度と彼の前に姿を現さなかつた。以後「欺かざるの記」は、信子を失つた哲夫の悲痛な苦悩によって埋められていく。

「苦痛忍び難し。されど忍ばざるを得ざる苦痛なるが故に、愈々苦痛なり。此の世の苦しきもあるかな。信子、信子。われを許せ。われ実に御身を榮します能はざりき。御身のわれに注ぎし真心のほど、しみぐうれしかりしぞや。」

(四月二十三日の記)

「余と信子とは今日限り夫婦の縁、全く絶えたり。昨日信子に遇ひぬ。信子の本意全く離婚にあることを確かめ得たり。(略)斯くまでに相愛したる信子、遂に吾と相離るゝに至りたる事、極めて悲痛の事なれど、人の心の計り難きを思へばこれも詮なし。」(同月二十四日の記)

「キリストの死」

余は一度死したる也。今や新生命に入りつゝあるに非ざるか。」(同月二十五日の記)

「自殺、自殺、余は自殺を欲す。否自殺の外に、余には為す可きの事なければ也。見るもの、きくもの皆な苦しみの種なり。」(五月四日の記)

この後哲夫は、「回想記」を書し、苦悩記を書し、日記を書し、独語して慰藉せんよりも、凡ての過去を過去となして、一心不乱、前程に進むの生涯たらざる可からず。故に筆をこれに措き、此の記はこゝに閉じ了はることゝなしたり(五月九日)と記して八月十四日まで「欺かざるの記」を中断する。だが、失踪した信子への未練とそれに伴う悲痛な孤独感は、翌明治三十年になつても色褪せることはなかつた。

一週間計り以前の夜の事なりき。

独り床に横はりて書を読み居たり。屋外は月冴えに冴えたれば人の心も自づから澄み、気静かに、体も何となくゆたかなるを覚えてあり。かくて言ふべき様なき平安を感じると同時に物足らぬ心地して淋しさを覚え

ぬる利那、戸外に信子立ちて今にも兩戸を叩くかと心おのゝき立ちて、ひたすら耳そばだて、まち侍る。侍てどもく戸はたゝかれず。暫くして次室に信子の座りて在る様覚えければ声を上げて二声三声、信さん信さんとよびて待てり。何の答もあらず。さては心づきし時の心地、如何なる言葉もてたとへつべき。泫然として涙下りぬ。(明治三十年二月二十四日の記)

今月十二日は悲しき日の当日なり。其の日九段公園に至りぬ。昨年は桜花散りせしに、今年は咲きそめ居たり。(四月二十二日の記)

「今月十二日」とは四月十二日のこと。一年前のこの日、信子は哲夫の前から姿を消した。信子の失踪は彼の心をずたずたにした。『欺かざるの記』の随所にそれが窺える。その中からほんの一部だけを右に引用してみた。これを小説「源おぢ」と読み較べてみる時、モデルの有無に拘らず、源叔父の悲しみが実は哲夫こと独歩自身の悲しみであったことに思い至る。たとえば「源おぢ」の次の場面、

語り疲れて暫時まどろみぬ。目さめて枕辺を見しに紀州あらざりき。紀州よ我子よと呼びつゝ走りゆく程に顔の半を朱に染めし女乞食何処よりか現はれて紀州は我子なりといひしが見る内に年若き娘に変わりぬ。ゆりならずや幸助を如何にせしぞ、わが眠りし間に幸助何処にか逃げ亡せたり、来れ来れ来れ共に捜せよ、見よ幸助は芥溜のなかより大根の切片掘出すぞと大声あ

げて泣けば、後より我子よといふは母なり。母は舞台見ずやと指玉ふ。舞台には蠟燭の光眼を射る計り輝きたり。母が眼のふち赤らめて泣き玉ふを訝しく思ひつゝ、自分は菓子のみ食ひて遂に母の膝に小さき頭載せ其儘眠入りぬ。母親より起し玉ふ心地して夢破れたり。源叔父は頭をあげて、

『我子よ今恐ろしき夢見たり。』いひつゝ枕辺を見た。紀州居ざりき。

母の見ている舞台は、阿波十郎兵衛という愛別離吉をテーマとする芝居である。そして源叔父の見る夢に登場するのは、亡き妻ゆり、亡き子幸助、源叔父の母、子供の時の源叔父、それに源叔父が養子にしようとしている紀州乞食とその母である。登場する人物はこのように多数であるけれども、この場面は、私には先に引用した明治三十年二月二十四日の記のヴァリエーションのように思われる。なぜなら、この場面の源叔父の喪失感が『欺かざるの記』の哲夫のそれに重なっているのだから。そして源叔父の縊死は、前年四月二十五日の記「余は一度死したる也」や、五月四日の記「余は自殺を欲す」という哲夫の情念の形象化と考えてもよいのではあるまいか。つまり、小説の主人公源叔父は、いや、源叔父の心情は、モデルとなった嘉治郎や他の船頭たちの心情というよりは、むしろ哲夫のそれだったのである。そう考えて、初めて源叔父の自殺が納得されるのである。

もつとも、源叔父の自殺の原因については、大串幸子が『源おぢ』―その愛と死について―<sup>①</sup>という論文において「愛する家族を失った悲しみと孤独を辛うじて耐えてきた翁が、正にそんな病苦の中で、彼の唯一の生活手段である自分の「舟」が、嵐によって「半ば砕け」たのを見たのである。恐らく、彼の死はその酷い現実を目前にした時、その場所の「十歩の先」で決行されたのであろう」と推察している。「源おぢ」の原文に「『われ行かん。』若者は舷燈を地に置いて走りゆきぬ。十歩の先已に見るべし。」とあるので、果して岩上の破舟の見える場所からそこまでが「十歩の先」であったのか疑問の残るところであるが、大串の推察は新しい見解を示していて示唆的である。

## 五

既に述べたように、独歩は「予が作品と事実」の中で源叔父と紀州が実在の人物であり、その身の上のことも事実であると云っている。そこで『欺かざるの記』を中心に、そのことに検討を加えてきた。その結果分かったことは、源太郎の身の上とモデル嘉治郎のそれとの間には、源太郎が自殺なのに嘉治郎は病死であったという大きな相違があること、その他にも妻子の死の順序の相違などさまざまな相違があることが判明した。しかも小説「源おぢ」は、哲夫の佐伯体験だけから生まれたものではなく、むしろ、佐々

城信子との一件が大きくその影を投げかけていることも分かってきた。源叔父の心情は信子を失って一年しか経っていない哲夫のそれに近いものであった。それゆえ、同じ佐伯体験を小説化した「春の鳥」よりも先に「源おぢ」が成ったのである。独歩は「源おぢ」を通して哲夫自身の苦悩に充ちた心の中を吐露せずにはいられなかったに違いない。このようにして「源おぢ」は、彼の死と再生の物語となる。哲夫の心情を仮託した源叔父は松の枝に縊死する。それはまた、国木田哲夫の形而上的の死を意味するものであった。そしてそこに、その物語を小説化した文学者国木田独歩が誕生する。ちなみにこの年独歩は、四月に湖処子、花袋、国男らと合著『抒情詩』を刊行してそこに独歩吟を掲げ、五月に処女作「源叔父」を書き上げ、哲夫の『欺かざるの記』を摘筆し、八月には「源叔父」を『文芸倶楽部』に掲載し、そして十二月には合著の詩集『青菜集』を刊行するのである。

## 注

(1) 『国木田独歩全集』第七卷(昭和43年・2刷・学習研究社刊)の「解説」で塩田良平は明治二十六年十月から翌年七月までの鶴谷学館収支計算表が掲載されている、明治二十七年十月発行の「鶴谷叢書」(十八号)を引用しながら、次のように述べている。

「又旅費二十二円五十銭が独歩の赴任旅費であるか、

その後任者の藤田賢治郎の旅費であるか判らないが、常識的には独歩の手当と考へられる。」(五六〇ページ)

(2) 小野茂樹『若き日の国木田独歩』(昭和34年・アポロン社刊)の一三二ページ。

(3) 松本義一『国木田独歩』源叔父』アルバム』(別府大学人文叢書1・昭和35年・別府大学図書館刊)の三八ページ「4、『欺かざるの記』から」に、以下のように述べられている。

「ところで、前年の十一月廿七日の記に、

昨夜、二階を下り坂本老人と語る、佐伯に一個の老翁あり。奇怪の者を担ふて行くをしばく見受けぬ、此老翁の事を問ひ、多少聞き得たり。此翁同情に堪えず。何れの時か遇ふて親しく語るべし。

一とあるところから、鎌倉文庫版の「国木田独歩全集」の第五巻では、「坂本老人」に「坂本永年」と注し、「老翁」について、

永年氏の子息真澄氏によれば、この翁は中の谷の避病院の爺にて日日役場との間を往復せりといふ。「源叔父」の一ヒントとなるものゝ如し。

一と記して居り、野田宇太郎氏も、『九州文学散歩』に、源おぢも、子供紀州も、実際に佐伯に居た人物で、独歩は佐伯に来てまもなくの十一月頃にこの二人を見ている。そして坂本家の縁側で主人夫婦から源おぢの

身の上話を聞き、東京に帰ってから源おぢが哀れな最期をとげたことを知った。その感動を追想の形式で書いたのが小説『源おぢ』である。

一と記して居られるが、この老翁が果して源叔父のモデルであろうか。

鎌倉版に記す、白坪(うしつば)地区の岡の谷の避病舎の爺は一般に源じいと呼ばれていた者で、坂本真澄氏はもちろん、既記の山名驥氏も、大賀重太郎氏もその姿を記憶して居られる。彼は横太りで、丈けは余り高くなく、頭ははげ上り、齒は抜けていたが、常にここにこして居て、やさしい男だったという。初め養賢寺の寺男を勤め、蟹田(がんだ)の松関に働き、のち避病舎に転じてそこで亡くなったという。

今、この男をもって直ちに源叔父のモデルとも、源叔父のヒントとも解しえぬわけで、独歩が十一月廿六日の夜坂本永年からその身の上を聞きえた老翁は、右記のように、源叔父のモデルとは別個の存在者であった。もっとも源叔父なる名はこの老翁のそれから来たものであったらうけれど一。

(略)

いったい佐伯地方、海岸地方では、「じい」とか「おじ」とかがよく用いられた。いずれかといえば、「じい」の方により敬意が含まれて居り、「おじ」の方は親しい間柄の用語で、それだけに敬意的なものが

なかつたものようである。

▽補—坂本浩氏の『国木田独歩』にも坂本永年に聞いた老翁を源叔父のモデルとしておられる。」

(4) 『国木田独歩全集』第一巻(昭43第三刷・学習研新社刊)所収「予が作品と事実」五二〇ページ。

(5) 松本義一は注(3)に引用の著書の三一ページに、「源叔父のモデルの探求には大学生の安藤博行君と共に非常に苦勞を重ねた」と書いている。

(6) その他にも例えば明治二十六年十一月四日の記に、その前日、弟叔「とめ嶋の野らに散歩をし、海近き番匠川の河口に見た渡守についても、「渡守を見き。比渡守りの小屋に入りて物語らば面白からまし。彼も亦、わが「物語」に入る可き一人ならずや」と強い関心を示している。

(7) 全集第七巻の注に「警報竿の小丘 葛鼻の頂上に竹竿を立てて、天気予報の色旗と風の方向を示す籠を掲揚してゐた。」とある。

(8) 六歳少年のモデルは注(2)の著に山中泰雄であったことが述べられている。泰雄は坂本永年の妹シゲの子である。

(9) このことは、哲夫が佐伯にいた頃に書いたと思われる「憐れなる児」に、既に見えている。

(10) 全集第七巻の本文五三四ページ一〇行目は、「待てども」ではなく「侍てども」となっている。

(11) 『解釈と鑑賞』平成三年二月号(至文堂刊)掲載論文。

(12) 原文に従って解釈するならば、若者は破舟の見える場所からある距離を走っていったのである。そしてその結果、「十歩の先」に源叔父の縊死の姿を「已オセに見るべし」なのである。従ってテキストによる限り、源叔父が自分の舟が砕けて岩の上に打ち上げられているのを確認して、その結果自殺したのかどうかは不明である。渡船を仕事にしているのだから、それは当然のことだと言えはそれまでだが、その時の源叔父の心身状態は必ずしもその当然のことをするようには表現されていない。紀州がいなくなり、「紀州よ我子よと呼びし時、目眩くらみて其儘布団の上に倒れつ」という状態なのである。しかもその直後には、「其日源叔父は布団被りしまゝ起出せず、何も食はず、頭を布団の外にすらいださゞりき」と述べられていて、そのまま嵐の一夜を迎えるのである。翌朝、「東の空漸く白しろみし頃」波止場に集った人々は、荒れ跡を見廻るうちに源叔父の舟が半ば砕けて岩の上に打ち上げられているのを発見する。そして、それを知らせにひとりの若者が「舷燈を地に置きて走りゆきぬ。十歩先已に見るべし。道に差出でし松が枝より怪しき物さがれり。(略)縊れるは源叔父なりき。」以上がテキストの本文である。それゆえ、

源叔父が「唯一の生活手段である自分の「舟」が、嵐によって「半ば砕け」たのを見た」かどうかは、テクストだけでは分からない。しかし、「見た」と解釈するかしないかによって、源叔父の自殺の原因の重さ、深さが違ってくる。